

Fate/crimson faker

Gヘッド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

錬鉄の英雄、深紅の贗作者、男はそう呼ばれた。

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」とかいう、fat e 史上最高の死亡フラグを残した男であり

「——さらばだ。理想を抱いて溺死しろ」なんて言いながら、剣で斬り刻んじやって

「オレもこれから頑張っていくから」って言ったくせに今ではアプリでオカンオカンと言われている彼だが、

もちろん彼の過去にも遍く絶望と僅かな光があったのだ。

そんな男の過去の物語

簡単に言ってしまうえばヘブンズフィールなのに、恋してたのは凜っていう話。

原作に忠実にいくつもりですが、矛盾点が見つかるかもしれません。その時はご愛嬌ということで。

更新期間は半年以上です。

0 話：プロローグ

目次

0話：プロローグ

——正義の味方になりたい。

あの頃のオレは光を求める蛾のようにただそれだけを求めていた。純粹に、ひたむきに。

そして、蛾は眩い光を見つけた。ひらりと揺らめくその光に蛾は何の迷いもなく飛び入った。

今思い返せば、あれは炎だったのだろう。身を焦がす理想に浸かっていたのだ。

オレの理想は——オレの信じた正義は、何一つ正しくなかった——

「——んなツ!?」

いきなり叩き落とされた。召還されたかと思えば、乱雑に積まれた家具の山の上において、当然僅か15センチほどの差では咄嗟の回避行動もできず、体を叩きつける羽目となってしまった。

「まったく、こんな召還をするのは何処の誰だ？」

オレは辺りを見回した。シックな雰囲気を感じた。真紅の絨毯の上にあるそれらの家具がサーヴァントの召還によって散乱してしまったのだろう。ヒドい召還をするものだ。

ああ、それでもオレはこの景色に見覚えがあった。それはオレの中にある過去。失い、失い、失い続けた地獄の日々とそれでもオレに与えてくれた愛を噛み締めることのできる一時の安寧。

「もつともこの景色記憶に散らばった家具などはないのだが……」

オレは心の奥底から湧いてくる喜びに堪えきれず、少しだけ口元を上げた。

目の前の扉が開いた。扉から入ってきた少女。赤いタートルネック、黒いミニスカートをひらりと揺らす。初対面であるはずのオレに鋭い眼光で睨みつけ、もとより隠せぬ苛立ちを顔に表していた。

その姿を見て、オレは心の底から湧き上がる喜びを押さえつけた。その姿はオレの記憶と全く同じ、思い出が現実世界に現れたかのような。忘れられない過去、オレの人生を狂わせた現実との交錯点。そこでまた彼女の姿を見ることができた。

今度はオレが聖杯戦争に呼ばれてしまったというわけか。

まったく運命というものに絶望したはずのオレだが、こんな日が来ようとは。壊れた幻想ブローケンファンタズム——もう正義の味方ではないのだが。

ああ、こんな姿を知ったら、お前はオレをどう思うだろうか。

遠坂凜——今日の前にいる彼女はオレの初恋の人であり、初めてオレにできた守らねばならない人であり——

——オレが守ることでできず、この聖杯戦争で死んだ人であった。

前世、そのように言えればいいだろうか？いや、過去とでも言っておこう。オレがまだ絶望という二文字を知らず、魔術もロクに使えず、ましてや正義の味方などと馬鹿げた理想に憧れていた頃の話だ。
そう、これは深紅^今の鷹^オ作者^レが生まれるまでの物語。